

# イギリス小説と批評の研究

原 英 一

2017年度のノーベル文学賞は、イギリスの小説家カズオ・イシグロに授与された。それに伴い、イシグロ関係の出版が相次いだ。小池昌代・阿部公彦ほか『カズオ・イシグロの世界』（水声社、2017.12）、別冊宝島編集部（編）『カズオ・イシグロ読本——その深淵を暴く』（宝島社、2017.12）、日吉信貴『カズオ・イシグロ入門』（立東舎、2017.12）等。ほかに、『ユリイカ』の2017年12月号は「特集 カズオ・イシグロの世界」を掲載した。これらは、著名な批評家や研究者の著述、発言も含めて、玉石混濁である。英米では、イシグロについての研究書は、すでに膨大な数に上っている。しかし、夏目漱石や川端康成の系譜を正統に受け継いでいる「日本的イギリス小説」であるイシグロ文学の本質に迫るものは、皆無と言ってよい。今後、日本の研究者は、日本近代文学の古典を原文で読めるという有利な立場にあるのだから、英米の学界に衝撃を与えるようなイシグロ研究を、日本語ではなく英語によって、発信することが重要になるだろう。

イギリス小説論ではないが、英語、英文学の現状について、さまざまなことを考えさせられたのは、外山滋比古『日本の英語、英文学』（研究社、2017.11）だった。奥付を見ると、外山氏は1923年の生まれ。ということは、本書刊行時点で94歳。文章には、繰り返しやや目立つことを除けば、衰えはみられない。驚異的である。本書執筆の動機は日本の英語と英文学の現状に対する危機感だ。とりわけ、小学校への英語教育導入が象徴する、外国語教育に対する無知、無理解への怒りがあちこちに感じられる。外山氏の批判は、明治以来の日本の英語、英文学受容史の奥深い造詣、裏付けのゆえに、説得力がある。さらに、英文学研究について、漱石以後、日本独自のものをいまだに生み出し得ていないことへの苛立ちも感じられる。

英語、英文学の教育について、正面から取り上げたのが、日本英文学会（関東支部）（編）、『教室の英文学』（研究社、2017.5）である。これは、日本英文学会関東支部の「教える」シリーズの第一回だという。原田範行支部長（現日本英文学会会長）によれば、このシリーズは、「日本英文学会が対象とする英文学…、英語学、英語教育といった研究領域に関する優れた知見と情報を共有し、これを拡充し教育的に活用することを旨として」名づけられたものである（「はしがき」）。主として関東支部会員から成る31名の執筆陣が、「序論」、「第1部 英語を教える」、「第2部 社会・文化を教える」、「第3部 英文学を教える」にわたって論述を展開している。このような書物が編まれた背景には、日本英文学会だけではなく、英文学の研究・教育が、さらには

## 回顧と展望

文学教育全体が直面している危機がある。教育現場としての、とりわけ英語教育の現場としての大学では、文学はどんどん片隅に追いやられ、「4技能」修得のテクニックを教えるだけの授業が圧倒的主流になりつつある。しかも、そこでは「読む」能力は軽視されている。薄っぺらな文章を読み、「事実」だけをざっくりと把握できれば、それでよしとされて、精読や深読みは軽視される。その結果、不毛の荒野は果てしなく拡大していく。その状況に対して、本書は一つの「抵抗」ないしは「反撃」となっているだろうか。

齋藤兆史『見つめ合う英文学と日本——カーライル、ディケンズからイングロまで』（NHK出版、2018.1）は、NHK ラジオ番組「こころをよむ」シリーズのテキストだが、良質な英文学教育の可能性を示してくれる。英文学と日本文化との関わりを、新渡戸稲造の愛読書、カーライルの『サター・レサータス』から R・H・ブライスの『禅と英文学』に至るまで、さまざまな著者やその著作を通して、追求している。齋藤氏の平易な語りの中で、キプリング、ラッセル、モーム等と日本の精神的な部分とのつながりが説きあかさされていく。日本の英語教育で、あるいは英文学教育で今や捨て去られてしまったかのような、これらの作家、作品が不滅の価値を持つことを再認識させてくれるのだ。齋藤氏が本書で繰り返し示唆しているのは、いたずらに「承認欲求」（外国に褒められたい、認められたい）をつのらせず、イザベラ・バードやカーカップの冷徹な日本批判に謙虚に耳を傾けることによって、日本文化は真の誇りを、品格 *dignity* を回復、再生させる可能性が持てるということだ。たとえば、イングロの作品に感じられる品格は、まさに日本的なものなのである。

ジョイスの『フィネガンズ・ウェイク』関係で、読み応えのある単著が二冊あった。まず、山田久美子『ジェイムズ・ジョイスと東洋 『フィネガンズ・ウェイク』への道しるべ』（水声社、2017.12）。作品中の日本語を出発点として、山田氏は、『フィネガンズ・ウェイク』の中に「東洋」がいかに取り込まれているかを、比較文化研究の立場から、広く深く追求している。その過程でパースペクティブは大きく広がり、ネストリウス派キリスト教（中国の景教）、イエズス会、『アラジン』、サヴォイ・オペラ、伊藤道郎などが取り上げられる。パリでジョイスと出会った日本人作家佐藤健の英文日記との出会いなど、現場を歩く著者のリサーチの成果が随所に見られる。『フィネガンズ・ウェイク』の言語空間が『ユリシーズ』を超える広がりを持つことが明らかにされていく過程は、非常にスリリングである。

奥田良二『『フィネガンズ・ウェイク』のプロローグを読む——riverrun から phoenish へ』（春風社、2018.1）は、冒頭の4パラグラフを「プロローグ」として、その41行分についての解釈を一冊の本としたもの。ジョイスのテキストは、いまさら言うまでもなく非常に重層的である。著者によればテキストの意味の層は、表層を第1層とすると第7層くらいまでであるという（「序章」）。奥田氏は、各パラグラフについて、

「解釈1」と「解釈2」を提示し、「解釈1」では第1層から第5層あたりまでを、「解釈2」では第4層から第7層あたりまでを探っていく。それぞれの解釈ごとに日本語訳が付いているのだが、その訳文を比較すると、あまりに大きな差があることに驚かされる。原文の重層性を一つの翻訳テキストにまとめることは不可能なのだ。一般読者には、通読することなど望むべくもない『フィネガンズ・ウェイク』。しかし、その面白さの一端を知るためには、本書は有用だろう。たとえ冒頭の4パラグラフだけであつたとしても、ジョイスのテキストを十分に味わった気にさせてくれる。中には「そこまで読んでいいのか」と思いたくなる解釈もあるが、それはそれで、愉しめる。

千森幹子『ガリヴァーとオリエント——日英図像と作品にみる東方幻想』（法政大学出版局、2018.3）は力作。『ガリヴァー旅行記』は、ごく初期の段階から口絵が添えられ、視覚的に捉えられてきた。一方、第三航海記には日本が登場するなど、オリエントとの関係が深い。千森氏によれば、本書は、『ガリヴァー旅行記』と「その英仏版図像にみるオリエント表象、特に日本表象を論じるのはじめての研究であり、明治から昭和初期にいたる『ガリヴァー旅行記』邦訳と図像研究にかかわる、本格的な受容研究である」（「プロローグ」）。第一章と第二章で『ガリヴァー旅行記』の多義性、多領域性、オリエント描写を、テキストを中心に、読解し、第三章以降で、図像にみられるオリエント表象を辿っていく。千森氏は初版から1970年代に至る、なんと113種類もの『ガリヴァー』挿絵を資料として検討する。とくに興味深いのは、明治以降の『ガリヴァー』邦訳にみられる挿絵と英仏版の挿絵とを比較対照する第五章以下である。多くの日本版の挿絵が西欧版の模倣である中で、たとえば初山滋のような個性的なイラストがあつたことがわかる。巻頭16ページに及ぶカラー資料をはじめ、多数のイメージが収録されている。

佐藤元状『グレアム・グリーン——ある映画的人生』（慶應義塾大学出版会、2018.3）で、著者は、グリーンと映画についての先行研究の「中心的な関心は、グリーンと映画の関係それ自体よりも、グリーンの小説のアダプテーションの歴史にある」と指摘し、そこで「手落ちとなっているのは、グリーンの小説と同時代の映画との生産的な共犯関係の考察」であるとする（「プロローグ」）。本書は、グリーンが1935年から四年半にわたって『スペクテイター』誌に連載した映画評から説き起こし、第二次大戦後の『第三の男』に至るまで、グリーンと映画との「共犯関係」あるいは「情事」の展開を追っていく。ヒッチコックの他、ルネ・クレールやジュリアン・デュビピエなどフランスの映画監督の作品とグリーンの小説とが絡み合う歴史は、『拳銃売ります』、『三十九夜』、『ブライトン・ロック』などを中心に、精緻に議論される。『第三の男』と西部劇との関連を指摘する第六章「男たちの絆——『第三の男』と『ヴァージニアン』」は、目を開かせられるものだ。

宮原一成『ウィリアム・ゴールディングの読者』（開文社出版、2017.10）は、著者が

## 回顧と展望

九州大学に提出した博士論文を元にして、ゴールディングと読者との関係を彼の長編全てを通して探求したもの。単行本として日本で出版されるゴールディング研究書としては、六番目だという。英米を含めて、ゴールディング研究は活発とは言いがたい状況の表れだが、伝記ではジョン・ケアリ (John Carey) とゴールディングの娘ジュディ・カーヴァー (Judy Golding Carver) による二種が出版され、作者の実像がかなり明らかにされた。本書はこれらの伝記を十分に活用しながら、読者反応批評の立場から、『蠅の王』をはじめとする長編小説の新たな「読み」に挑戦したものである。バルトの「作者の死」とゴールディングがどのように向き合ったのか、精緻に分析される。ハイデッガー、バルクソン、レヴィナスなど、主要な思想家の思想が縦横に駆使されている。

武田悠一・武田美保子 (編著) 『増殖するフランケンシュタイン——批評とアダプテーション』 (彩流社, 2017.3) は、『フランケンシュタイン』というテキストが現代批評の諸言説で捉えられ得る多様性、無数のアダプテーションを生む神話創造力などについての論考をまとめた書物。第一部「批評」では、肉食主義、梅毒がシェリーの時代に持っていた意味の解明から始まり、ポストコロニアリズム、クィアなどをテーマとする論文が5本、第二部「アダプテーション」では、ミルトン、ルソーなどに「起源」を探る論考から始まり、演劇、小説、映画、さらに日本のマンガでの『フランケンシュタイン』、とくに「怪物」のアダプテーションを追求した論文5本。

東秀紀『アガサ・クリスティーの大英帝国——名作ミステリと「観光」の時代』 (筑摩書房, 2017.5) のオビには「「ミステリ」と「観光」から見る大英帝国盛衰史」とあるが、大英帝国衰亡史の方が正しいだろう。クリスティーのミステリは衰亡していく大英帝国を背景としている。『オリエント急行の殺人』や『ナイルに死す』などの読者であれば、「観光」が彼女の作品の重要な要素であることは直感的に納得できる。その「観光」は、帝国が二度の大戦によって解体されていく状況を観る旅である。東氏は、もう一つのキーワードとして「田園」を挙げ、旅との関係を読み解いていく。最終的には20世紀の旅人、クリスティーの姿が浮き彫りになる。

仙葉豊『さまざまなるデフォー』 (関東学院大学出版会, 2018.3) は、著者が過去40年にわたって続けてきたデフォー研究の集大成というべきもの。大阪大学に提出された博士論文を元に、大幅に加筆修正されている。最も古いものは本書の第三章として収められている「デフォーにおけるフィクションの始まりと終わり」。これは日本英文学会新人賞の記念すべき第一回受賞論文であった。デフォーの小説がいかにか始まり、いかに終わるかを論じた、今や古典的な業績である。その前の序章「「非国教徒処理の近道」と曖昧なるデフォー」、第一章「身の上相談と小説の起源」、第二章「幽霊実話「ヴィール嬢の幽霊」」は、デフォーのフィクションの背景ないし基盤を提示している。以下は、『ロビンソン・クルーソー』から「ジョナサン・ワイルド」に至るまで、おな

## イギリス小説と批評の研究

じみのデフォー文学が論じられる。

土屋倭子『トマス・ハーディの文学と二人の妻——「帝国」「階級」「ジェンダー」「宗教」を問う』（音羽書房鶴見書店、2017.10）は、ハーディの生涯を、二人の妻、エマとフローレンスを軸として叙述するもの。二人の妻に焦点が当てられているとはいえ、全体としてはハーディの評伝である。副題にあげられている「帝国」や「階級」などのテーマが、彼の人生と創作活動に絡み合う様が描かれる。ハーディの小説のみならず詩作にも十分な紙数が割かれている。著者の長年にわたるハーディ研究の結果蓄積された該博な知識が随所にうかがえ、大変重厚な内容となっている。

宗洋『世紀末の長い黄昏——H・G・ウェルズ試論』（春風社、2017.7）は、タイトルからわかるように、ウェルズが1890年代に書いた『タイム・マシーン』、『モロー博士の島』、『透明人間』、『宇宙戦争』などの科学ロマンスを主として論じたもの。サイクリング小説『偶然の車輪』、社会小説『トーノ・パンゲイ』も扱われる。これらの小説が、世紀末の科学、思想、文化の背景の中に位置づけられ、「見ること」と「見られること」をキーとして解釈されていく。

西村美保『ヴィクトリア朝小説における女性使用人の表象——階下から読む8つの物語』（彩流社、2018.3）は、女性の「使用人」(servant)がヴィクトリア朝小説でどのような役割を果たしているかを論じたもの。『デイヴィッド・コパフィールド』のペゴッティから始まり、8篇の小説が取り上げられる。乳母、女中、侍女、家政婦、ガヴァネスなど、小説中に登場する女性使用人は多種多様。最後に扱われるのは「農場使用人」としてのテスである。

柳瀬尚紀『ユリシーズ航海記——『ユリシーズ』を読むための本』（河出書房新社、2017.6）は2016年に没した翻訳家の著者が、ジョイスと『ユリシーズ』について、過去30年以上にわたって、あちこちに書いたものを集めた本。最も古いものは1982年の『朝日ジャーナル』の記事。岩波新書で出た『ジェイムズ・ジョイスの謎を解く』（1996）は全文が再録されている。巻末には未完に終わった『ユリシーズ』訳稿のうち、柳瀬氏が決定稿と考えていたと思われる断章を掲載。

新谷好『オスカー・ワイルドの文学作品』（英宝社、2018.2）は、過去30年以上にわたる研究活動を集約したもので、約400ページに及ぶ。ワイルドの人生とその著作活動の全体を論じるという、きわめて意欲的な著作である。「はじめに」ではワイルドの人生が要領よくまとめられ、「第1章」では小説が、「第2章」では劇作品が、「第3章」では詩作品が取り上げられている。詩作から書簡まで、ワイルドの執筆活動のほぼ全容が明らかにされている。簡素なタイトルは、著者の自信を示すものなのだろう。

武田美保子『身体と感情を読むイギリス小説——精神分析、セクシュアリティ、優生学』（春風社、2018.3）。著者によれば「本書は、「身体」をめぐる議論を基に、いかにイギリス小説が「身体」が語る声に耳を傾けてきたか、「身体」の問題や身体イメー

## 回顧と展望

ジが、いかに深くイギリス文化の根幹に関わっているかを明らかにする試みである」(「序章」)。

手塚裕子『キャサリン・マンスフィールド——荒地を吹き渡る風のように自由に』(春風社, 2017.12)は、マンスフィールドの本格的な評伝。その生涯を、その作品と絡み合わせながら、たどっていく。ミドルトン・マリの他、D・H・ロレンス、ヴァージニア・ウルフ等との関係も過不足なく記述されている。

廣野由美子『深読みジェイン・オースティン——恋愛心理を解剖する』(NHK出版, 2017.6)は、オースティンの小説6篇についての解説書。廣野氏は「認知の歪み」がオースティンの真のテーマであり、それを探ることが彼女の小説を読む醍醐味であるとする(「プロローグ」)。認知療法で中核的認知構造とされる「スキーマ」をキーワードとして、キャサリン、エリザベス、エマなどのヒロインが提示する問題を追及している。

近藤耕人『アイルランドの言葉と肉——スターンからベーコンへ』(水声社, 2017.7)。著者はフランシス・ベーコンの絵画から「食(は)み出ている」(p. 203)肉を感じ取り、それが「アイルランドの肉だと直感し」(p. 235)、そのテーマをアイルランドの文学と絵画の中に探求している。ベーコンの他、18世紀から20世紀にわたって、スターン、スウィフト、J. B. イェイツ(W. B. イェイツの弟)、ワイルド、ベケットの作品が論じられている。

20世紀英文学研究会(編)『20世紀英文学研究 XI 二十一世紀の英語文学』(金星堂, 2017.5)。「20世紀英文学」研究会が「21世紀の英語文学」を論じた論文集。大平章氏による序論「二十一世紀の英語文学の行方」が、二十世紀後半から二十一世紀の今日までの英語による文学がたどった軌跡を要領よくマッピングしている。全十章で取り上げられているのは現役作家が大部分だが、最終章はミュリエル・スパークの『死を忘れるな』となっている。巻末に「作家・作品紹介」が付いていて、なじみの薄い作家・作品についても、概略がわかる。

三神和子(編)『オーストラリア・ニュージーランド文学論集』(彩流社, 2017.3)は、8本の論文からなる。各論文の間にはコラムが挿入されている。これらの国の文学は、原住民のアボリジニやマオリの歴史と文化に対する意識の覚醒によって、近年大きく形を変えてきている。ここに集められた論文では、原住民抑圧の歴史、ヨーロッパとの関係、さらには日本との結びつきが論じられ、様相を一新したオーストラリア・ニュージーランド文学の姿が立ち現れている。

杉浦清文・武井暁子・林久博『教養小説、海を渡る』(中京大学文化科学研究所, 2018.3)。英語圏文学の専門家とドイツ文学の専門家による共著。タイトルに「教養小説」が入っているが、このテーマが正面から論じられるのはドイツ文学の林氏による序章「教養小説とは何か」と第一章「ドイツ文学における教養小説」のみ。武井氏担

## イギリス小説と批評の研究

当の第二章は夏目漱石のイギリス留学記、第三章は『ハリー・ポッター』論になっていて、教養小説との関連は薄い。杉浦氏による第四章と第五章はジーン・リース論。

日本オースティン協会(編)『ジェイン・オースティン研究の今——同時代のテキストも視野に入れて』(彩流社, 2017.4)。日本オースティン協会の発足十周年を記念する論文集。第一部「切り結ぶオースティン——作品とそのコンテキスト」、第二部「企むオースティン——その眼識と技巧」、第三部「呼応し、時空を超えるオースティン——影響と変奏」、第四部「同時代作家たち」の四部構成で、計19篇の論文が収録されている。協会会員の意気込みが感じられ、我が国のオースティン研究の隆盛を示すものと言いたいところである。しかし、本書を読んで、いくつかの疑問と危惧を感じた。疑問の一つは、執筆陣の男女比に大きな偏りがあることだ。執筆者19名のうち、男性はわずか3名。あまりにも不均衡。さらに大きな疑問は、「オースティン研究の今」とうたいながら、本書中で最も卓越した論文、三馬志伸氏の「ティルニー将軍とティラニー」は、20年前の英語論文の再録であり、日本オースティン協会前会長、海老根宏氏の「ジェイン・オースティンと読書行為」も20年前の論文の「改稿」であることだ。これが日本のオースティン研究の閉塞状況を示すものではないことを祈りたい。

(東京女子大学特任教授)